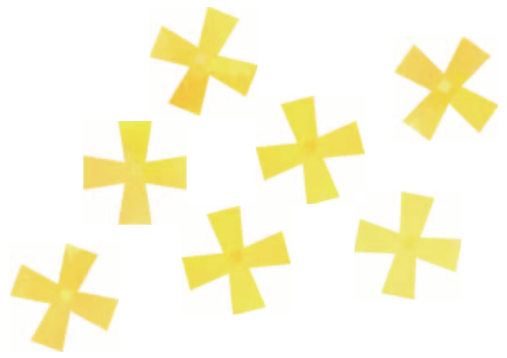


菜の花

NHO IBUSUKI MEDICAL CENTER



No. 47
令和2年4月

指宿枕崎線「西大山駅」



薩摩富士



開聞岳と菜の花



池田湖とリビングストーンデイジー

当院のロゴマークは、指宿市が誇る「菜の花」をモチーフにしています。



たくさんの黄色い円は花の部分を表しており、菜の花は小さな花が集まって1つの花を形成しているというように、病院のスタッフ1人ひとりが集まって、病院という組織があるのだということを表現しています。

緑の弧は菜の花の葉と、病院（花の部分）には新しい風が常に舞い込み、また病院が地域に新しい風を送り出しているという「風」のイメージを示しています。

contents

- P.2 “コロナ危機 - 今こそチーム医療 -”
- P.3 事前対応型リスクマネジメント
- P.4 心をひとつに
- P.5 看護部長新任挨拶
- P.6 感謝
- P.7-9 採用者・異動者紹介
- P.10 指宿南九州消防組合との事後検証会
地域医療連携室だより
- P.11 職場紹介
- P.12 指宿 菜の花通信
外来診療担当医一覧

理念

患者さまにやさしく、
地域に信頼される
良質な医療の提供をめざします。

運営方針

- 1 がん診療の治療の向上をめざします。
- 2 成育医療の充実をめざします。
- 3 救急医療の充実をめざします。
- 4 地域医療機関との連携を図り、説明と同意に基づいた安全で質の高い医療をめざします。



〃 コロナ危機 — 今こそ チーム医療 — 〃



院長
鹿島 克郎

新型コロナウイルス感染症が世界的に蔓延し、パンデミックになりました。4月上旬、ヨーロッパ各地やアメリカでは危機的状态に陥り、医療崩壊している国々も見受けられます。日本でも緊急事態宣言が発出され、危機的状況になっています。

感染者の自覚症状が不明瞭な場合も多く、クラスター感染から院内アウトブレイクになり、医療活動を制限する必要に迫られた九州圏内の病院もあります。新年度を迎え多くの方々が移動を余儀なくされる中、感染リスクがさらに高まることが予想されます。

当院が指宿地域の救急患者さんや重症患者さんを受け入れることができなくなると、地域医療は崩壊します。当院での新型コロナウイルス感染症のアウトブレイクを未然に防ぐ最大の方策は、職員が一丸となってコロナ感染予防を心がけることです。今年度のテーマである多職種チーム医療を今こそ、発揮しましょう。

当院でのコロナ対策の要点は下記の様になります。

- しばらく、歓迎会や集会は自粛する。
- 原則、面会禁止とする。
- 入院患者さんが、海外渡航歴者との濃厚接触がないかを確認する。
- 肺炎患者さんの治療に際しては、コロナウイルス感染者の可能性を考慮し対応する。
- 病院スタッフは全員、マスク着用する。
- 院内での会議、話し合いは、30分以内とし、前後で換気を行う。
- 外来待合室では、1時間ごとに換気を行う。
- 職員は、プライベートの場でもコロナ感染予防を心がける。
 - 1、換気の悪い密集空間は避ける。
 - 2、多くの人が密集している場所は避ける。
 - 3、近距離での会話は注意する。

今年1年を通じて長期間継続する必要がある対策になるかもしれませんが、根気良く続けていく覚悟が必要です。終わりのない戦いはありません。

事前対応型 リスクマネジメント



副院長
相星 壮吾

医療現場においては、全てのリスクに対して事前に予防策や対応策を準備しておくことはできません。私たちの職場では、確かに、時として想定外のことが発生するからです。しかし、どれだけ想像力が優れた人でも予想できないとか、誰も思いつかないような悲観的シナリオを得意とする作家でもかけないとかいう類いの事件は、実際のところ、極めて稀であると言っていいでしょう。多くの場合、100人のうち5人程度は思いつくことができるようなものだと思います。そして、そのレベルの「想定外」については事前の対応を準備しておくべきですし、可能であれば、準備した対策を実行して事件の発生を未然に防止したいと考えています。

いくつか例を挙げてみましょう。例えば、緊急処置に必要な物品が見つからない……そんな事がないようにしておくべきことは整理整頓です。整理整頓は実施しているのに、あるべき場所に見当たらない……といったような場合を想定して、バックアップの物品の在りかを記したものが準備してあれば、さらに丁寧な事前対応であるといえるでしょう。例えば、新興再興感染症のアウトブレイクに備えて普段からしておくべきことは標準予防策です。それに加えて、アウトブレイクが実際に身近に迫ってきたときには感染制御チームが適時適切な情報を流したり、シミュレーションを実施したりする必要もあるでしょう。

不思議なことに、対応するべきリスクは極めて多種多様であり、一般的には想定が難しいであると思われるのに対して、その対策は極めて一般的で体系化され「あたり前のこと」と思われるものばかりです。とは言え、あたり前のことをあたり前にちゃんとやることこそがなかなか難しい……これもまた現実です。

職場全体のリスクマネジメントの力を向上させることができるように、想像力に長け、誰も思いつかないような悲観的シナリオも書くことが出来る管理職を目指して職務に精励したいと存じます。

今年度もどうぞよろしくお願いたします。

心をひとつに



事務部長
清水 就人

昨年5月1日から、元号が「令和」になりました。「令和」の出典は「万葉集」の梅花の歌、三十二首の序文「時あたかも新春の好き月（よきつき）、空気は美しく風はやわらかに、梅は美女の鏡の前に装う白粉（おしろい）のごとく白く咲き、蘭は身を飾った香の如きかおりをただよわせている」（中西進著「萬葉集 全訳注 原文付」の中の訳）で、奈良時代の初め、当時の太宰府の長官であった大友旅人が書いたものとのことです。

自然災害が多かった「平成」に対し、「令和」は災害がない時代になってほしいと願う人も多かったのではないのでしょうか。しかし、災害ではないものの、新型コロナウイルス感染症が、それも世界規模で蔓延しているのが今の状況です。

そういう中ですが、今年も桜が咲きました。そして、4月になって当院に新しい仲間36名が加わりました。この中には新卒者14名（薬剤師1名、臨床工学技士1名、看護師10名、事務職2名）も含まれます。さらに、この新卒の薬剤師、臨床工学技師、看護師のみなさん全員が国家試験に合格されたことは、誠に嬉しいニュースです。早く病院に慣れて、いずれは病院の中心となって活躍されることを期待しています。このような状況ですので、各職場には歓迎会の自粛を要請しています。しかし、いずれは、「遅くなったけど、歓迎会やりますよ」と言える日がきっと来ます。その日が一日でも早く来ることを願って、今は全職員一丸となって頑張りましょう。「令和」には、人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ、という意味があるそうです。この誰も経験したことのない未曾有の危機の中、指宿医療センター職員みんながお互いを思いやる気持ちを忘れず、心をひとつにして、この状況を一緒に乗り越えていきましょう。

看護部長 新任挨拶



看護部長
堀田 伊津美

4月1日付で看護部長として赴任いたしました、堀田伊津美と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

国立病院機構内で転勤して8か所目の施設になりますが、指宿医療センターは2度目の勤務になります。8年ぶりに指宿に向かう道程を最初は懐かしく思いましたが、2回目にはいつもの通り慣れた道や風景のように感じられたのが不思議な感覚でした。変わらないものへの懐かしさや嬉しさもありつつ、やはり新しくなった病棟を見上げると喜びがこみ上げてきました。感激に浸りながらも、これまで築き上げてこられた先任者や職員の皆様への敬意と、それを引き継いでいく重責に身の引き締まる思いです。

指宿医療センターの精神と使命は変わらず、「患者さまにやさしく、地域に信頼される良質な医療の提供」の理念のもと、地域に役立つ、地域に愛される、地域になくってはならない病院づくりです。看護部の理念は、「安心・信頼・自律」を掲げ、患者さまとご家族の視点に立ち、個々を尊重し、生活に視点をおいた安心安全な看護の提供を目指します。また、医療や社会の変化に応じた看護を提供するために、自己研鑽に努め、自律した看護を目指しています。国立病院機構には、共通の看護職員能力開発プログラムがあります。チームで後輩を育み、お互いに学び合い、後輩の成長と自己の成長を承認しあうという考え方を大切にしています。共に学び合い、専門職としての知識・技術と思いやりの心を育み、「安心」という言葉に、深く温かい思いを込めていけるように取り組んでまいります。

働き方改革や地域医療構想など、社会や医療情勢の変化とその対応に追われる感はありましたが、今や想像を越えた世界レベルの苦境に直面しています。この時にめぐり合わせた仲間と共に、力をあわせ、心をあわせて、この苦境を乗り越えていかなければなりません。これまで築いてきた地域連携の基盤をもとに多施設・多職種の協力体制をより一層強化し、地域が一丸となって立ち向かえば、きっと明るい未来は開けます。

温泉に恵まれ開聞岳を望む風光明媚な指宿の魅力を、満喫できる日が早く来ることを楽しみに、私もこの病院、この地域の一員として、役割を果たしていけるように微力ながら努めてまいります。今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

感謝



前看護部長
福丸 洋子

令和2年3月31日をもって、指宿医療センターを最後に、退任することになりました。今まで、臨床と教育の場で勤務させて頂きましたが、定年まで勤務できたのは、厳しさの中にも人のやさしさにたくさん出会えたこと、その方々のご支援、ご協力があったからだと感じています。心より感謝致します。

振り返るとこの30数年の中で、教育の経験ができたことで、人の成長や可能性を信じる事が分かるようになってきたように思います。教育から臨床に配置換えとなり、指宿医療センターは2年間という短い期間ではありましたが、その中においても、看護職員の皆様の一生懸命取り組む姿や笑顔、緊張した顔、リラックスした声等々から一人ひとりの成長を見ることができて、これほどうれしく頼もしいことはありませんでした。特に第73回国立病院総合医学会ポスター発表においてポスター賞を4題のうち3題取得できたのは良い思い出です。

指宿医療センターは南薩医療圏、特に指宿市においては欠かせない急性期・回復期の病院です。新病棟が開設した平成29年は、経営も落ち込みました。しかし、皆さんの頑張りで、平成30年度、令和元年度と、患者数は増加し、経営も回復していきました。呪文のように毎日唱えていた「減価償却前黒字」もクリアすることができました。指宿医療センター職員のチーム医療の賜物と思います。

また、南薩地域は高齢化が進み、院外の施設、在宅等との連携が重要です。患者さんを温かく受け入れると共に、地域の方々と研修会や会議を持ち、顔の見える関係性になってきました。さらに、地域との連携を密にした地域に信頼される、そして患者さんにやさしい病院として発展していくことを願っております。

国立病院機構で、温かい人と環境に恵まれている指宿医療センターの臨床で勤務を終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。これまで、お世話になりありがとうございました。